首里城尚家関係者ヒアリング調査業務

～知名茂子さんの聞き取り調査より～

久場まゆみ*1

１　調査の目的

これまで当財団は、琉球王国時代に王家であった尚家関係者より聞き取り調査を行い、平成 21 年度に『尚家関連ヒアリング調査報告書』を刊行した。しかし、王家については未だ不明なことも多く、聞き取り調査を継続し、より多くの情報を収集し、後世に残していく必要性がある。そのため、以前より聞き取り調査に協力していただいた知名茂子氏（尚泰王四男尚順男爵の息女）へ引き続きヒアリングを行った。茂子さんの聞き取りについては、誰から聞いた話か、年代についてもほぼ同定できるので、これまでの地域の古老のヒアリング報告や文献資料等と比較研究できる情報である。

２　聞き取り対象者について

知名茂子さんは、1917 年（大正 6）年生まれである。松山王子と呼ばれた尚順男爵を父に持ち、母は尚家の家扶であった伊是名朝睦氏の息女真子である。茂子さんは第一高等女学校を卒業後、台湾総督府の高雄州庁に勤める首里桃原の松氏知名の長男定興氏（1912～2000）へ、嫁ぐと共に 1937 年 11 月に台湾へ渡り、昭和 21 年 11 月に沖縄に帰ってきた。茂子さんからは、幼少から嫁ぐ 1937（昭和 12）年までの松山御殿や中城御殿の様子を聞くことができる。

３　「お妃選び」について：【幼い頃、冬の夕食後、お茶の間で暖まりながら、父（尚順）が話してくれた】

①ある王様は、御殿・殿内から選ばれた女の子数名に食事を与えた後、お付きの人が、女の子が使った箸を火鉢の灰に入れ、どこまで灰が付くかというのを調べたという。食事をパクパク食べた者の箸には、長さが長く灰が付き、食べ物をきちんと摘まんで食べた者の箸は、先の方にしか灰が付かないという。これは、お行儀の良さ、躾について見るものである。

②若い王様は、数名の少女に毬突き等の遊びをさせ、その様子を見、退席させ、ある程度、人数を絞り込んだ後、再度、部屋に入れた時に、どの座布団に座るかでお妃を決めたという。徳のある人が、お妃になるべき人の座布団に座るという。毬突きは、体の発達等を見るものであった。

③若い王様のお妃は、12,3 歳の時にお嫁に来た時、勉強中に眠ってしまったので、王様自ら、お妃を抱っこして寝室に連れて行ったという。

いずれの王様も、御妃選びの様子を御簾から見ていたようである。

４　中城御殿について：【幼い頃から嫁ぐまでの頃】

「本家（中城御殿のこと）」には、小さい頃、母親と一緒に春と秋のお彼岸、お盆の時に訪問した。中城御殿には、尚泰長男尚典夫人である野嵩御殿や、安室御殿（尚順男爵の妹、尚安子。聞得大君の就任儀礼を受けた最後の人）らが住んでおり、安室御殿へご挨拶（お辞儀）すると、「チー（来たねぇ）」とにこにこ微笑んで言葉をかけられたそうである。会話を交わしたことはなかったそうである。安室御殿は、わが子が亡くなった時も遺体に近づくことはしなかったそうで、おそらく神に仕える身であるためであろうと思った。

---

*1 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター 事業課 調査展示係 主任

尚安子様は、(私の) 父親の１歳下の妹である。潔癖で男性のような気質であった感じがする。神に仕える身のためか、洗濯した着物は、畳に直接置かず、女中がたたんで筵に乗せて、二階にある箪笥へ運んだという。ある日、女中が筵から誤って着物を落とした時、すべて洗濯し直しを命じたというエピソードが残っている。

安室御殿の後継者として、中城御殿の行事等を執り行った今帰仁延子様がいらした。今帰仁様は、尚泰王の長男尚典の娘である。今帰仁様が拝みをなさる時は、赤い衿の黄色い着物に着替えて行ったそうである。

母は行事の手伝いをしたが、子ども達は、子ども部屋に集められていた。未婚の者は、20 歳前後であっても、子どもとされていた。大人達は仏壇のある部屋に集まっていたので、行事がどのように行われていたかはわからないという。また、戦前、御嶽にお参りしたことはなかったが、御嶽の北側にあった「上之御殿（ウィーヌウドゥン)」には、一度訪れたことがある。

中城御殿には、メー（前）とウーチバルがあり、メーは、尚家の財産を管理したりする、役所のような機能があった。尚順男爵は、スーガミー（総ガミー）という役目をしていた。ちょうど同級生のお父さんも働いており、毎朝、職場へ弁当を届けに来ていたという。「鈴引きの間」という場所は、メーとウーチバラの境目で、20 代前後の袴を着た男性が、そこで野嵩御殿等のことづけを聞いたという。鈴引きの間までは、３段ぐらいの段差があり、野嵩御殿等が住むウーチバラの方が 25 センチばかり、床の高さは高かったという。

５　松山御殿について：【女学校に入る前までの出来事】

芭蕉布用の糸について：小さい頃、松山御殿には、毎年決まった時期に、松川から中年女性が２,３名来て芭蕉の糸をしごいていて、繊維を取っていたという。庭には、作業するための仮小屋が設置された。女性たちは頭の上に芭蕉を載せ、髪を梳くように繊維をしごいていた。太い繊維がどんどん細かくなり、キラキラしてくるのが珍しく、長い間見ていたという。女学校に入る頃（昭和の始め頃）には、作業の女性たちは来なくなっていた。

６　正殿に住んでいる猿について【父（尚順男爵）から、夕涼みの時、聞いた話】

父が小さい時、お父さん（尚泰王）から、「首里城の３階には猿が住んでいる」という話があり、お付の人と一緒に、明かりを持って探しに行ったことがあるという。

７ 朝御飯について【幼少～女学校時代】

兄弟姉妹が多いので、朝は大忙しであった。女の子達は、髪の毛をずっと伸ばし、自分で小さい時から三つ編みをしていた。着替えて三つ編みすると、台所へ行き、大きな鍋（シンメーナービ）に沸かされている味噌の入った「カチュージー」(かつおぶしを削って入れた出汁）をそれぞれお椀に入れて飲み、登校したそうである。このカチュージーには具は入っていなかったが、毎日欠かさず飲んでいたのでクンチ（体力）が付いたと思う。

８　木村伊兵衛について【女学校時代】

ある日、県外から木村さんというお客様がいらして、紅型のモデルをすることになった。自分の紅型を着て、姉の惠子（やすこ）と一緒に写真を撮ってもらった。(※この写真は、現在沖縄県立博物館・美術館の収蔵品として残っており、木村伊兵衛のちくまライブラリーの刊行物にもなっている)

このように、茂子さんを通してみる尚家の人々は、普通の家族である。農園の管理していた尚順は、学校の宿題は、農園の花木に水遣りや草むしりを済ませてからしか、取り組めなかったという。躾にも厳しい父親であったが、自分の幼少時代の思い出等を夕涼みしながら話したりと家族と過ごす様子が窺い知れる。また、役所の機能を持つ中城御殿についても引き続き、聞き取り調査を重ね、随時まとめていきたい。